

## 映画の小箱

北海道の片田舎の小さな駅。汽車や駅舎が定年を迎えても、男は永遠に“ぼっぼや”であり続ける。現代のメルヘンであり奇跡である。

金丸弘美=文

text by Hiromi Kanamaru

ここに、もつとも美しい現代のメルヘンが生まれた。誠実に生きた人々の魂が、一瞬一瞬の生の輝きが凝縮されたような、きらきらと光る珠玉の詩がここにある。

雪降るなかを機関車が煙を上げて力強く走る。その走りは、やがて時間と空間を超えて、雪の降りしきる、架空の小さな駅、幌舞駅へと導いていく。もうその時点で、どここの片田舎にもあるような駅舎でありながら、実はどこにもない、ファンタジックな世界へと、いつのまにか連れ去られているのである。

一日に何人も利用することのない、たった一両の車両が行き交うだけの、ローカルの最終駅。その駅舎を中心に物語は始まる。

駅舎は、もうずいぶんと時間を経たとみえて、柱も扉も年季が入って、黒光りをしていて、何度も塗りなおされたのだろう、厚ぼったい窓のペンキもひび割れがみえる。舞台はこの小さな駅舎だけだ。

幌舞の駅には、定年を間近に控えた駅長の乙松（高倉健）が、どんな雪深いときもホームに立ち、たった一両だけの気動車「キハ12」を律儀に迎え、そして送り出す。その姿勢は微塵もゆるぐことがない。彼の背中だけで、乙松という男が、どんな時代も、ひとつの鉄道とともに、誠実一途、ひたむきに生きてきたことがわかるのだ。

乙松が定年を迎えるように、駅舎も路線も廃止され、走りつづけたキハ12もスクラップになろうとしている。それを知ってか知らないふりをしていいのか、乙松は、周囲の音が耳に入らぬかのように、列車の運行に注意を配り、毎日の仕事に忠実であるとする。

駅舎の目の前で、かなり年季の入った「だるま屋食堂」を営むムネ（奈良岡朋子）は、乙松の定年後を気づかずに、店を引き継いでもらおうとするが、乙松の返事といえば、



「おれはぼっぼやだもの。他になんにもできねえ。第一、駅のお客さんはどうすんの」と、まるで定年後も、駅を守るかのような口ぶりなのである。

機関士の見習い時代からの同期で、やはり定年を迎える仙次（小林稔侍）は、乙松に、自分と一緒に定年後も仕事をしてほしいと頼み込む。実は仙次は、リゾートホテルに迎えられ、それが決定しているのだ。

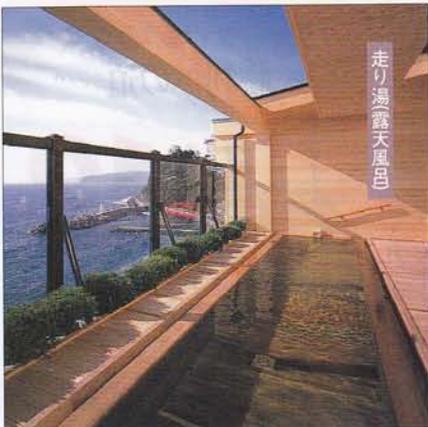
しかし、乙松の答えは同じ。「おれはぼっぼやだもの。エレベーターだって乗れねえ。機関車のことしかわからねえ」だ。

乙松の無二の親友である仙次、そして乙松と駅舎を見守り人生を共にしてきただろう、だるま屋のムネを中心にした会話のなかから、次第に乙松の人生が浮かびあがってくる。

妻静江（大竹しのぶ）は高齢出産で子供を生んだが、生後間もなく死なせてしまったこと。子供の死のときも、また妻の死のときも、乙松は駅舎に立ち、列車の送り迎えの仕事に忠実であろうとしたこと。

『鉄道員』

# 男はひたむきに、 機関車とともに生きてきた



走り湯(露天風呂)

海、湯に  
恵む。  
味を  
愉しむ。



屋上露天風呂をはじめとする自慢のお風呂。  
季節の食材を使った一流の料理。  
どうぞ、ごゆっくりとおくつろぎください。

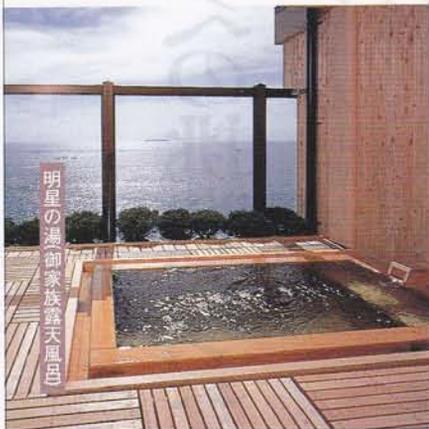
お食事は通常のお部屋出し以外に、お食事処で  
楽しめるホテルスタイルの「悠々」がございます。

●ご宿泊プラン「悠々」  
2名様 1泊2食付(お料理に合わせて2つのコース)  
●Aコース お1人様 25,000円(税別)  
●Bコース お1人様 21,000円(税別)

熱海・伊豆山温泉



静岡県熱海市伊豆山温泉  
TEL.0557(80)3531(代)



明星の湯(御家族露天風呂)



仙次と機関車を動かし、炭鉱の町として栄えた時代、集団就職で若者たちを送り出したときも、落盤事故があった日も、どんな時代も、常に機関車を動かしてきたこと。  
やがて、乙松の駅舎へのただならぬ愛着は、自分の人生を重ねてきた仕事の場というだけでなく、妻も子も仕事の犠牲にしたという自責の念もあって、この駅舎に愛する家族とともに留まりたいのだと、じんわりとわか

ってくるのだ。  
そして、乙松を定年後の仕事に誘い、口説く仙次さえ、実は乙松の定年後を心配する以上に、長年連れ添った乙松を失うことの不安と、自分が今までの仕事から離れていくことの怖さを抱えているのだというのがわかる。  
淡々としたなかにも、みんなの切実な思いが端々に吹きこぼれる。そんな駅舎に、可愛らしい古い人形を抱いた女の子が現れる。それはまるで天使のようだ。乙松は、彼女の微笑みに、亡くした子や駅舎を通った近所の子らの思いを重ね合わせるのである。  
物語が進むうちに、乙松や仙次の過ぎ去った人生や青春、家族と過ごしたひととき、駅舎の背負ってきた年輪、列車が曳いてきた時代が、次第次第に重なってくるかのようだ。そこにはまるで登場人物たちの魂と、かつてあったであろう戦後のさまざまな人々の思いと夢が満ちあふれ、そこが乙松の駅舎なのか、夢が満ちあふれ、そこが乙松の駅舎なのか、駅舎が乙松なのか、本当の話なのか、主人公たちがつむぎだした幻想なのか、わからなくなるほどの、まるで気持ちのいい夢を見るような、奇跡を生み出すのである。

### 鉄道員 (ぼっぼや)

(1999年 配給=東映)

監督=降加康男

出演=高倉健/小林稔侍/大竹しのぶ/奈良岡朋子/田中好子/広末涼子/志村けん